

オランダで子育てする 日本のお母さんたちに 広がる“くりんぐ”の輪



最近、学齢に達しない子供をもつ若い世代が海外駐在に派遣される傾向があり、海外での幼児教育が問題化しつつある。中でも、ことばの発達に大切な幼児期を外国の限られた社会環境でいかに過ごさせるかは大きな悩みである。

そうした悩みを克服したいと願う母親たちが、日本で幼稚園教諭として経験を積んだ向山陽子さんと共に2年前“くりんぐ文庫”を開いた。手持ちの本を持ち寄り、居間から始まったこの子供文庫は、アムステルフェーンにある欧州囲碁センターに書庫を持つまでとなり、会員も140名にまで膨らんだ。絵本や本の貸出、読み聞かせ、母と子のサークル、バザー、季節の行事等の活動を行っている。

この“くりんぐ”の輪は、他の面でも母親たちのさまざまな自主活動を生み、広がってきた。医療面では帝京メディカルセンター小児科医の中里先生を囲んで定期的な座談会を開き、精神面では日本人カウンセラーの協力を得て、悩み相談室を設けている。またオランダで妊娠出産するケースも多く、日本と異なるオランダの医療保険体制の理解を深めようと情報収集も進行中である。

昨年10月には、母と子の日本語プレイサークル（1～4歳）がアムステルフェーンの“ロバブルグ”で始まったほか、最近とみに日本人が増えてきたアウトホールンにも“木ぐつ文庫”“スベル・オ・テーク（おもちゃのある遊戯室）”等、日本人の子供たち対象のサークルがある。

オランダで初めて文庫を開いた加藤千穂子さんは「図書館もスベル・オ・テークも日本人の悩みを話すと快く場を提供してくれました。オランダ人の外国人に対する寛大さ、本当の優しさを感じずにはいられません」と語る。

これからオランダに赴任される方々にぜひご紹介したい自主活動だ。

問い合わせ：アムステルダム日本商工会議所

(KLMオランダ航空、機内誌ウィンドミル '93. 7.)